私たちの部誌から

二十七期生　前田　和子

「エピソードを書け！」と申しつけられたのですが……さて……たった二年前のことだけれど、私のはかない記憶力の限度内に残っているほどの事件は、何もなかったのです。少なくとも卓球部の女子においては。

そこで、なんとか原稿用紙の白い部分を埋めるため、私たちの部誌から……

ともかく人数が少なかったこと。

四十八年一月三十日（火）

Kちゃんが来た。たぶんいやがおうでも入ってもらうことになるでしょう。これは卓球部の女子のあさましい性質をあらわすのではなく……いえ、やっぱり境遇がわるいんです。どうしたって人の顔を見ると、卓球部に入れたくなるっていうこの性質はつちかわれずにはいられなかったんですよね。

この時のKちゃんにもみごとにふられ、四人という人数に変化はありませんでした。

それからちっとも試合に勝てなかったこと。

決して勝つのが当然というほど、うまくはなかったけれど、まぐれに一試合ぐらい勝ててもよかったのに。全敗、全敗、また全敗。朝八時に試合が始まると、十時ごろには近くのお店でやけ食いパーティ兼反省会という感じ。一生けん命教えてくださった先輩方には申し訳ないのですが……こちらも本当に一生けん命やってはいたのです。

四十八年三月三十日（金）

さみしがり屋のひと言り。

富士高木造ボロ校舎。二一二教室でしるす—試合の熱気と陰険な視線と負け審判のぼう然とした顔からのがれて、教室にたった一人。また負けた。勝てる相手に負けた。逆転された—一部省略—卓球部の皆様ＧＯＯＤ—ＢＹＥ私卓球アキラメマス。モウ泣きそうだ。

真赤なサインペンで部誌にはこんなふうに書いてあったこともありました。

○最後にそれでもみんな卓球部が好きだったこと。

四十八年四月一日（日）

私はこの部に魅力を感じるし、愛着をもってるし、この部から出ていくとすると、私には心に感じるものが減ってしまい、わずかになってしまうだろう…（一部省略）…このクラブが一番充実しているところだと私は信じて疑わない。

二十七期女子一同